

平成22年5月6日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19320053

研究課題名（和文） RUSSIAN PRAGUE—両大戦間のプラハにおける文化の交錯の研究

研究課題名（英文） RUSSIAN PRAGUE - A Study of Cultural Interchange in Prague between Two World Wars

研究代表者

諫早 勇一（ISAHAYA YUICHI）

同志社大学・言語文化教育研究センター・教授

研究者番号：80011378

研究成果の概要（和文）：両大戦間のプラハは「ロシアのオクスフォード」と呼ばれるような、亡命ロシアの教育・学術の中心地だった。本研究では、亡命ロシア人の文学サークル「庵」やプラハ言語学サークル、チェコスロヴァキアのアヴァンギャルドグループ「デベトシル」らの活動を通して、プラハにおけるロシア文化とチェコ文化との文化の交錯の実態を探るとともに、当時のチェコ文化の活況が、かなりの部分その「多民族性」に由来していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Between two World Wars Prague was the center of education and learning of Russian emigration, and was called “Russian Oxford”. Our study tried to investigate the cultural interchange between Russian culture and Czech culture in Prague by studying activities of “Hermitage”, “The Prague Linguistic Circle” and “Devetsil”. And we concluded that prosperities of Czech culture between two Wars depended largely on its ‘multiethnicity’.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
年度			
年度			
総計	7,900,000	2,370,000	10,270,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：亡命ロシア文化、文化の越境、文化の交錯、プラハ、アヴァンギャルド、汎スラヴ主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の亡命ロシア文化研究は、パリやベルリンのような西欧の都市を中心に行われていて、チェコスロヴァキアのようなスラヴ諸国における亡命文化の研究は遅れてい

た。

(2) プラハにおける比較文化研究は、ドイツ文化・ユダヤ文化とのかかわりが主で、ロシア文化とのかかわりは、これまであまり研

究されてこなかった。

(3) これまでの亡命文化研究は政治・社会研究や文学研究が主で、演劇・美術・思想などを含んだ文化研究はほとんど行われていなかった。

(4) こうした観点から両大戦間のプラハにおけるロシア文化とチェコ文化とのかかわりを、文学・演劇・美術・思想など幅広い視野から研究することをめざした。

2. 研究の目的

(1) プラハにおける亡命ロシア人の文化活動を文学だけでなく、演劇・美術・思想など幅広い領域にわたって検証し、チェコ文化とのかかわりの中で再検討する。

(2) プラハを中心に活動していたチェコ・アヴァンギャルドの芸術理論や実践活動を跡付け、そこにおよぼしたロシア・アヴァンギャルドや社会主義リアリズムの影響の意味を考察する。

(3) 両大戦間のチェコ文化の活況をプラハ言語学サークルとプラハ哲学サークルを中心に検証し、そこで「多民族性」が果たした役割を歴史的視点も交えて考察する。

(4) プラハの文化遺産に見られる「多民族性」と、多層的な都市文化の様相について、プラハにおける墓地の表象を中心にして文化史的に考察する。

(5) 以上の研究をもとに、両大戦間のプラハを舞台にした亡命ロシア文化やロシア・アヴァンギャルド文化とチェコ文化との文化の交錯を、文学・演劇・美術・思想など幅広い領域にわたって文化史的に再検討する。

3. 研究の方法

(1) チェコスロヴァキアで刊行されていた亡命ロシアの新聞・雑誌や、当時の回想録・歴史的ドキュメントなどを調査して亡命者の文化活動を跡付ける。

(2) ソヴィエト国内のロシア・アヴァンギャルド文献とチェコスロヴァキアのアヴァンギャルド文献を渉猟し、両者の関係について具体的なイメージをつかむ。

(3) 現地プラハの図書館・文書館などで資料調査を行い、当時の資料を収集するとともに、現地調査を行って、多層的な文化活動の立体化を図る。

(4) 作家、芸術家、思想家らの著作を原文

で精読して、彼らの作品を味わうとともに、その思想を咀嚼し、その意義を歴史の中に位置づける。

(5) 毎年開かれる研究会で適宜成果を発表し、メンバーから批判を仰ぐとともに、招聘した他分野の専門家から新たな知見を得て、その後の研究に役立てる。

(6) 以上の成果を逐次紀要等に発表して研究の発展を図り、最終年度にはメンバー全員が執筆する研究成果報告書をまとめてホームページ上に公開する。

4. 研究成果

(1) アルフレッド・ベーム率いる文学サークル「庵」のメンバーたちは、「現代性」を掲げて、パリの亡命詩人たちとは異なった、実験的要素の強い独自の文学活動を行ったが、それは従来言われてきたような親ソヴィエト的なものではなく、むしろ親アヴァンギャルド的なものだったことを明らかにして、パリで論陣を張ったアダモーヴィチ、ホダセーヴィチらと、プラハで活躍したスローニム、ベームらの間で繰り広げられた亡命ロシアの文学論争の評価に新たな視点を切り開いた。

(2) チェコのアヴァンギャルドサークル「デベトシル」の中心メンバーだったカレル・タイゲの評論活動や芸術的実践を追うことにより、従来ソヴィエト・ロシア固有のものとしてきた、社会主義リアリズムとアヴァンギャルドをめぐる論争が、チェコスロヴァキアでも活発に行われていたことを明らかにした。そして、ミラン・クンデラやスヴェトラナ・ボイムの所説と比べて明確になったタイゲの社会主義リアリズム批判の先進性は、これまで軽視されてきたチェコ・アヴァンギャルドの意義の再評価につながるにちがいない。

(3) プラハ言語学サークルやプラハ哲学サークルにおけるヤコブソン、カルツェフスキーらのロシア人、マテジウス、パトチカからのチェコ人、ウーティツ、グルーベらのドイツ人の活躍を検証することにより、両大戦間のチェコ文化の活況が「多民族性」に由来していることを解き明かしたが、その「多民族性」とはハプスブルク帝国時代から引き継いだものばかりでなく、マサリク大統領時代の開放的な政治社会体制が呼び寄せた亡命者にも多くを負っていることを明らかにして、戦間期チェコスロヴァキア文化史を読み解く新たな視点を提起した。

(4) 墓地の文化史を考察する手がかりと

してダニエラ・ホドロヴァーの小説『憂いの都市』で扱われているプラハのオルシャヌイ墓地を取り上げ、そこにはドイツ人・ユダヤ人・ロシア人・ウクライナ人などさまざまな民族の記憶がとどめられ、プラハの都市文化の多層性が埋め込まれていることを明らかにしたが、このことは文化史における墓地の意味を再認識し、プラハの文化の「多民族性」を考える新たな視野を切り開いたものといえるだろう。

(5) チェコスロヴァキアの初代大統領マサリクが提唱した、「ロシア行為」と呼ばれる亡命ロシア人に対する資金援助政策のおかげで、戦間期のチェコスロヴァキアには数多くのロシア人学生・学者・文化人が訪れたが、なかでもコンスタンチノーブルのロシア・ギムナジウムを遠くチェコスロヴァキアのモラフスカー・トシェボヴァーまで生徒・教員も含めて移動させる計画は、亡命ロシアとチェコスロヴァキアの友好関係を象徴する出来事であり、その学校からは後にプラハのロシア文学を担う詩人たちが多数輩出された。この移転を検証することにより、亡命の第二世代が亡命文化に果たした役割に新たな光が当てられた。

(6) 以上の5点を中心に、両大戦間のプラハにおける文化の交錯の実態を検証することによって、当時のチェコスロヴァキアは亡命ロシアと友好的で緊密な関係を結んでいただけでなく、西欧諸国以上にソヴィエト文化と深いつながりを持ち、同時にソヴィエト文化に独自の厳しい批判の視点を持っていたことが明らかになった。このことは当時ソヴィエト国内や中・東欧諸国などによく見られた「スラヴは兄弟」だと説く汎スラヴ主義的な傾向の意味に再検討を迫るものであるばかりでなく、亡命ロシアとソヴィエト・ロシアの双方に向き合わざるをえない周縁スラヴ諸国の立場を再認識させるものであり、戦間期ヨーロッパの文化史を国際関係論につなげる新たな視野を切り開くものといえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

- ① 諫早勇一、プラハのロシア詩人たち—「現代性」をめぐる論争、RUSSIAN PRAGUE—両大戦間のプラハにおける文化の交錯の研究 (科学研究費補助金・基盤 (B)・研究成果報告書)、査読無、2010、1-11
- ② 諫早勇一、ガリポリー異境の成立、辺境と異境—非中心におけるロシア文化の比

- 較研究 (科学研究費補助金・基盤 (B)・研究成果報告書)、査読無、2010、10-17
- ③ 石川達夫、プラーグ学派のロシア人—両大戦間チェコ文化の活況と多民族性、RUSSIAN PRAGUE—両大戦間のプラハにおける文化の交錯の研究 (科学研究費補助金・基盤 (B)・研究成果報告書)、査読無、2010、47-65
- ④ 石川達夫、チェコ国歌に潜んでいた矛盾—両大戦間チェコスロヴァキアの民族問題、ヨーロッパにおける多民族共存と EU—多民族共存への多視点的・メタ視点的アプローチ (神戸大学大学院国際文化学研究科付属異文化研究交流センター2009 年度研究報告書)、査読無、2010、3-22
- ⑤ 太平陽一、両大戦間チェコの左翼文化内部とその分裂—プロレタリア文化・アヴァンギャルド・社会主義リアリズム—、RUSSIAN PRAGUE—両大戦間のプラハにおける文化の交錯の研究 (科学研究費補助金・基盤 (B)・研究成果報告書)、査読無、2010、23-46
- ⑥ 阿部賢一、オルシャヌイ墓地—その歴史と表象、RUSSIAN PRAGUE—両大戦間のプラハにおける文化の交錯の研究 (科学研究費補助金・基盤 (B)・研究成果報告書)、査読無、2010、12-22
- ⑦ 諫早勇一、亡命ロシアの子どもたち—モラフスカー・トシェボヴァーのロシア・ギムナジウムをめぐる—、言語文化、査読有、第 12 巻第 1 号、2009、277-291
- ⑧ 諫早勇一、絶望と二重世界、文学・映像における「分身」テーマの総合的研究 (科学研究費補助金・研基盤 (B)・研究成果報告書)、査読無、2009、8-21
- ⑨ 太平陽一、表層の分裂と深層の分裂、文学・映像における「分身」テーマの総合的研究 (科学研究費補助金・研基盤 (B)・研究成果報告書)、査読無、2009、68-83
- ⑩ 阿部賢一、プラハのアール・ヌーヴォーと〈アルフォンス・ムハ〉、ユリイカ、査読無、2009 年 9 月号、2009、187-202
- ⑪ 太平陽一、ロシア芸術論からみたレヴィ＝ストロース、思想、査読無、No. 1016、2008、162-182
- ⑫ 太平陽一、カレル・タイゲの映画論、スラヴ学論集、査読有、第 11 号、2008、44-66
- ⑬ 諫早勇一、プラハのロシア文学—ベームと〈庵〉を中心に—、言語文化、査読有、第 10 巻第 1 号、2007、101-119
- ⑭ 石川達夫、ソロモンの印—ボフミル・フラバルと『あまりにも騒がしい孤独』、『あまりにも騒がしい孤独』(松籟社)、査読有、2007、138-155
- ⑮ 石川達夫、パトチカとナショナリズム—

—「チェコ民族再生運動」とチェコ・ナショナリズムをめぐって、思想、査読有、No.1004、2007、8-27

- ⑯ 石川達夫、ヤン・パトチカ——受難を超える哲学者、『歴史哲学についての異端的論考』（みすず書房）、査読有、2007、1-33
- ⑰ 阿部賢一、〈待合室〉、あるいは難民の滞留空間、武蔵大学人文学会雑誌、査読有、第39号、2007、1-25

[学会発表] (計5件)

- ① 諫早勇一、ゴーゴリの«ПОШЛОСТЬ»をめぐって、日本ロシア文学会第59回研究発表会、2009年10月24日、筑波大学
- ② Yuichi Isahaya、Набоков и молодые пражские поэты、2009年6月25日、St.Petersburg / Russia
- ③ 石川達夫、ボフミル・フラバルとチェコの「笑い」—「運命の被支配者」の詩学、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」・国際交流基金共催国際シンポジウム「中欧の詩学」、2009年2月8日、大阪大学
- ④ 阿部賢一、ヨゼフ・チャペックと〈慎ましい芸術〉、カレル・チャペック＝シンポジウム、2008年10月25日、北海道大学博物館
- ⑤ 阿部賢一、終着駅を求めて 往還する〈ロマ〉、伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション：ワークショップ「郊外と暴力」、2008年7月5日、立教大学

[図書] (計1件)

- ① 石川達夫、岩波書店、チェコ民族再生運動——多様性の擁護、あるいは小民族の存在論、2010、532

[その他]

ホームページ等

http://www.kinet-tv.ne.jp/~yisahaya/RUSSIAN_PRAGUE.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

諫早 勇一 (ISAHAYA YUICHI)
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：80011378

(2) 研究分担者

石川 達夫 (ISHIKAWA TATSUO)
神戸大学大学院・国際文化学研究科・教授
研究者番号：00212845
大平 陽一 (OHIRA YOICHI)

天理大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：20169056

阿部 賢一 (ABE KENICHI)

武蔵大学・人文学部・准教授

研究者番号：90376814

(3) 連携研究者

無し